

元屋敷遺跡発掘調査報告書

1984年3月

島根県広瀬町教育委員会

はじめに

広瀬町は、尼子、毛利、堀尾三氏の城下町として栄えたところであります。国の指定史跡である富田城跡を中心として、随所に城砦跡や館跡をはじめとする遺跡群が集中しております。

ところが近年、富田城跡の南北に存在する塩谷と新宮谷において農業構造改善事業が計画され、また、従来よりこの地域は家臣団屋敷の所在地と考えられていましたため、その遺跡の実態を把握する必要が生じました。そこで、昭和55年度から4か年計画で発掘調査が実施され、富田の城下町全体の構造を考える上で貴重な資料となる建物跡など数多くの遺構が検出されました。

本書は、その最終年度にあたり、新宮前谷の最奥部を対象に実施した成果を取り急ぎまとめたものであります。部分的な調査であったため、その全容までは明らかにできませんでしたが、これが歴史資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

なお、調査実施にあたり、御指導・御協力をいただきました島根県教育委員会並びに地元関係者各位に対し、衷心より厚く御礼申し上げます。

昭和59年3月

広瀬町教育委員会

教育長 横地 忠夫



例　　言

1. 本書は、広瀬町教育委員会が国庫と県費の補助を受けて、昭和58年度に実施した元屋敷遺跡の調査報告書である。

2. 調査地は、島根県能義郡広瀬町大字富田字新宮 205他である。発掘は、昭和58年10月1日から11月5日まで実施し、その後若干の補足調査を行った。

3. 調査体制は、以下のとおりである。

事務局　横地忠夫（教育長）、足立育夫（教育次長）、海原誠二（社会教育課補佐）、鹿田久栄（社会教育係長）、太田善明（同主事）

調査員　竹中哲（広瀬町教育委員会臨時職員）

調査補助員　伊丹喜浩、伊藤克己、道端実、山脇幸人（島根大学学生）

4. 調査にあたっては、地元各位の協力があり、島根県教育委員会文化課西尾克己、内田律雄、島根県立博物館村上勇の二氏からご指導をいただいた。

5. 遺物整理には発掘担当者、調査補助員の他に次のものが参加した。

内田雅己、宍重史朗（富田城関連遺跡群調査整備委員会臨時職員）、加藤吉史（大阪学院大学学生）、杉山浩司、曾田稔、畠健（島根大学学生）

6. 図版に収めた写真的うち、航空写真、新宮党館跡については島根県教育委員会の提供を受けた。

7. 本書の作成は、西尾克己氏の協力を得て竹中哲が行なった。

目　　次

I 調査に至る経過	1
II 位置と歴史的環境	2
III 調査の概要	4
1 区	4
2 区	9
IV 結　　語	10
V 図　　版	

挿 図 目 次

第 1 図	調査区位置図	1
第 2 図	元屋敷遺跡と周辺の主要遺跡	3
第 3 図	元屋敷遺跡 I 区トレンチ配置図	4
第 4 図	元屋敷遺跡 I 区遺構全体図	4・5
第 5 図	元屋敷遺跡 I 区 T - 2 遺構実測図	5
第 6 図	元屋敷遺跡 I 区 T - 2 出土遺物実測図	7
第 7 図	元屋敷遺跡 I 区 T - 3 遺構実測図	8
第 8 図	元屋敷遺跡 I 区 T - 3 出土遺物実測図	8
第 9 図	元屋敷遺跡 II 区トレンチ配置図	9

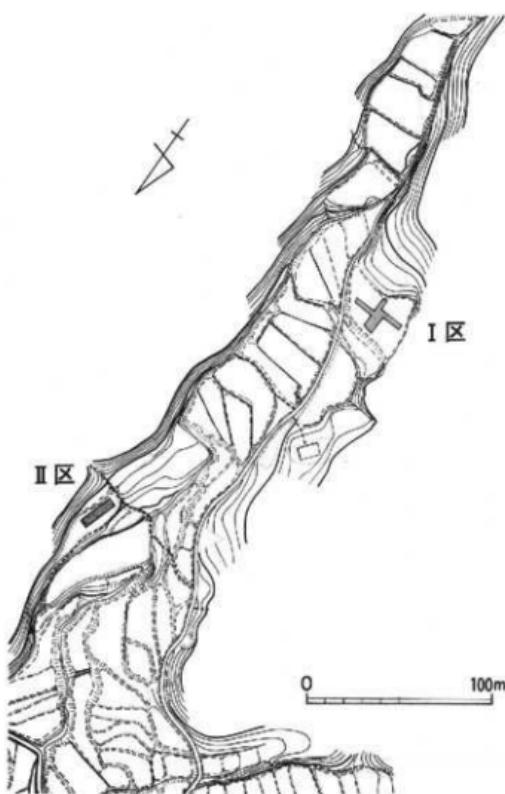
図 版 目 次

図版 1	元屋敷遺跡 航空写真
図版 2-1	元屋敷遺跡 I 区発掘前遠景（東側から）
図版 2-2	元屋敷遺跡 I 区発掘後遠景（西側から）
図版 3-1	元屋敷遺跡 I 区 T - 2 遺構検出状況
図版 3-2	元屋敷遺跡 I 区 T - 3 遺構検出状況
図版 3-3	元屋敷遺跡 I 区 T - 2 出土遺物
図版 4-1	元屋敷遺跡 I 区 T - 3 出土遺物
図版 4-2	元屋敷遺跡 II 区 遠景（西側から）
図版 5-1	新宮党館跡 遠景（南から）
図版 5-2	新宮党館跡 建物跡
図版 6-1	大畑地区 遠景（東北から）
図版 6-2	大畑地区 掘立柱建物跡
図版 7-1	惣連場地区 遠景（南から）
図版 7-2	惣連場地区 遺構検出状況
図版 8-1	今田地区 遠景（東から）
図版 8-2	今田地区 鋸跡

I 調査に至る経過

広瀬町教育委員会は、富田の城下町を考える上で重要な位置を占め、また、從来より武家屋敷跡と考えられていた塩谷・新宮谷地区において農業構造改善事業が計画されたため遺構の範囲と構造を確認する目的で、昭和55年度より国及び県の補助を受けて発掘調査を実施することになった。発掘調査は事業対象地が広域なため切土予定地を対象に行った。

昭和55年度は、月山南側の塩谷について発掘調査を実施した。調査の結果、谷中央部で集石遺構・土壙と溝を伴う長さ83mの石積施設等を検出した。また谷入口付近は当時沼か堀のような湿地が存在していたことが確認された。



第3図 調査区位置図

昭和56年度は、月山北側の新宮谷について9地区を対象に発掘調査を実施し、礎石建物跡・掘立柱建物跡・池跡・土壙等が検出され奈良時代と戦国時代後半から江戸時代初頭までの二時期に営まれていたものであることが明らかになった。

昭和57年度は、新宮谷4地区を対象に発掘調査を実施し、掘立柱建物跡・土壙・溝状遺構・鉋跡等を検出した。そのうち今田地区からは、県内いざれの型にも属さない小舟部と小舟焚口部の閉塞状況に特徴をもつ近世鉋跡が発見された。

本年度は、新宮谷2地区を対象に調査を実施した。

Ⅰ 位置と歴史的環境

広瀬町富田は、広島県境に近い中國山地に源を発する飯梨川の中流域にあたり、その支流が形成している狭長な谷の一つである新宮前谷の最奥部に元星敷遺跡は所在する。新宮谷は、月山北麓に位置し、この谷の入口から約700m以上の上流部分は、中央の丘陵によって前谷と後谷とに分けられている。新宮党館跡をはじめとする新宮谷遺跡群は、日当たりのよい微高地に点在している。周辺部は、大部分が山林で、川沿の緩斜面には、棚田が形成されていたが、現在実施中である圃場整備事業のために、旧状は変わりつつある。

本地域周辺における遺跡を概観してみよう。飯梨川下流に広がる安米平野は、出雲地方のなかでも特に遺跡密集地として著名であるが、富田城周辺地域では、古い時期の遺跡は知られていない。菅原地内の苔沢遺跡は、町内で初めて縄文時代前期の遺構・遺物が出土している。しかし、弥生時代の遺跡は確認されていない。

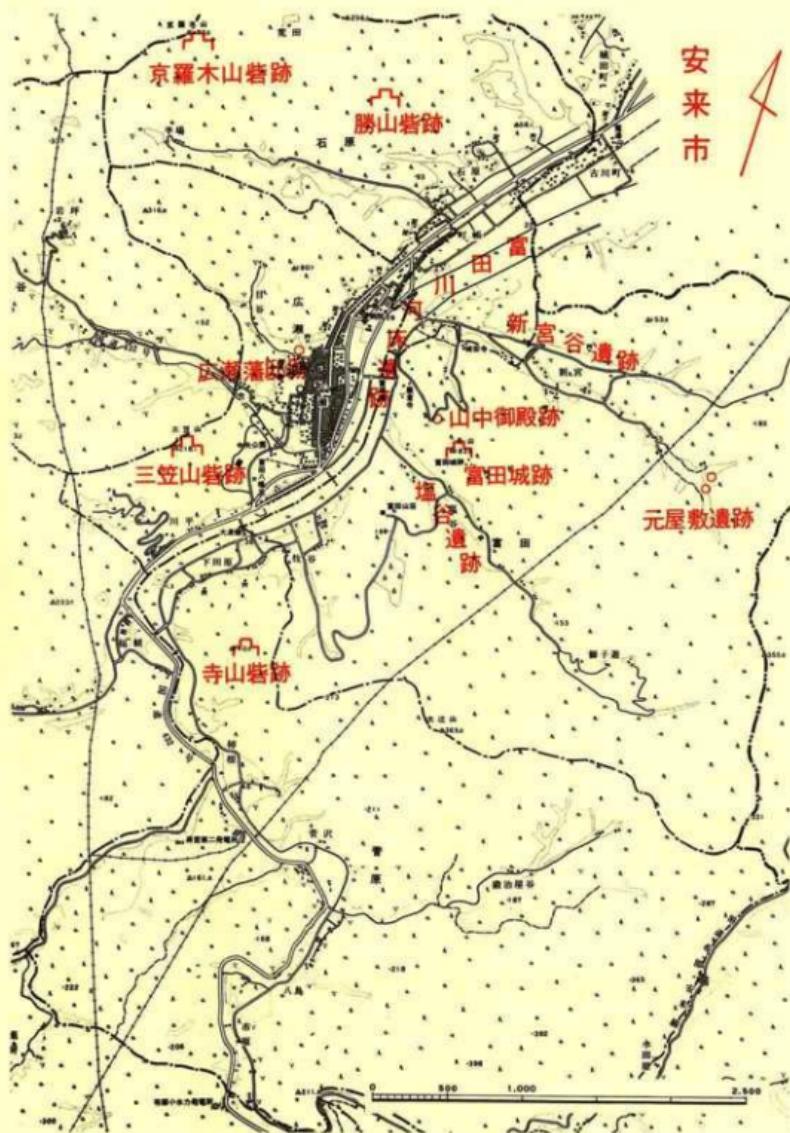
古墳時代の遺跡としては、2基以上からなる福頼古墳群・石原古墳、人骨が出土した本郷上横穴群・矢田横穴群・八幡山横穴群・台頭成横穴群・川平横穴群などの古墳・横穴や、須恵器・土師器片を伴なう官尾I・II遺跡の集落跡がある。

律令時代には、8世紀に編纂された『山雲國風土記』によると、現在の広瀬町の大半は意宇郡飯梨郷に属していた。新宮谷遺跡の惣連場地区からは、出雲国庁跡出土のものと酷似する土器類が発見されており、郷庁跡の可能性も考えられている。

中世になると、城跡を主として遺跡の数は急激に増える。戦国時代の雄であり、陰陽11カ國にその勢力を有した尼子氏の居城である富田城跡が、木遺跡の南西部に位置している。また、その周辺地域には、尼子十砦に數えられる三笠山砦跡・勝山砦跡・寺山砦跡・京羅木山砦跡等の城砦や、新宮谷には尼子国久を中心とする新宮党館跡、菅谷入口付近には里御殿跡、さらに、塩谷には館跡の可能性が強い明星寺跡といくつもの館跡の所在が知られている。他には、富田城跡西麓に、城下町と推定される富田川河床遺跡がある。ここから出土した陶磁器は、中・近世陶磁器の指標となっている。寺院跡については、洞光寺跡・宗松寺跡・万松院跡・懸持寺跡・新寺跡・中光寺跡・長樂寺跡等が新宮谷に存在している。また、尼子晴久、堀尾吉晴、堀尾忠氏等の城主の墓も点在する。

近世のものでは、昨年の調査で確認された伯耆型の特徴をもつ今田鉢跡が、本遺跡付近に存在している。

本遺跡は、概ね以上のような環境のもとに存在している。



第2図 元屋敷遺跡と周辺の主要遺跡

III 調査の概要

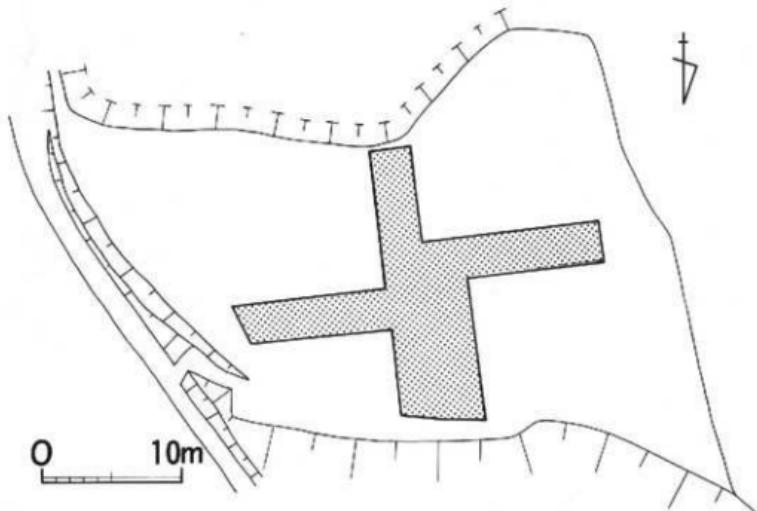
元屋敷遺跡では、2ヶ所の調査区を設定して発掘調査を実施した。このうち最奥部に設定した調査区は、最も区画の大きい田園で、その約5分の1について行い建物跡・集石遺構・溝跡などを検出したのをはじめ、布志名焼・美濃焼・唐津焼・土師質土器等が出土した。新宮川沿いの微高地上に設定した調査区では陶磁器片が若干出土したが、遺構は確認できなかった。

以下、検出遺構と出土遺物の概要を記す。

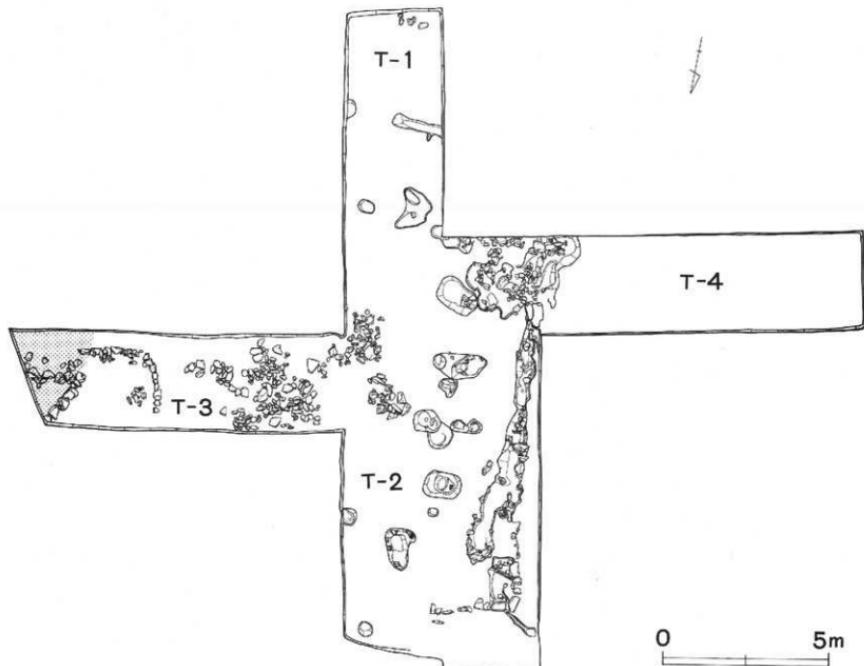
I 区

この調査地点は、現在「元屋敷」という字名が残っている。聞き取り調査によれば、江戸時代末期まで線香の生産販売を行っていたが、家業が傾き明治の初め広瀬の町に出たということである。

調査はまず東西南北に幅3mのトレンチを入れ、遺構の確認を行った。その結果、盛土

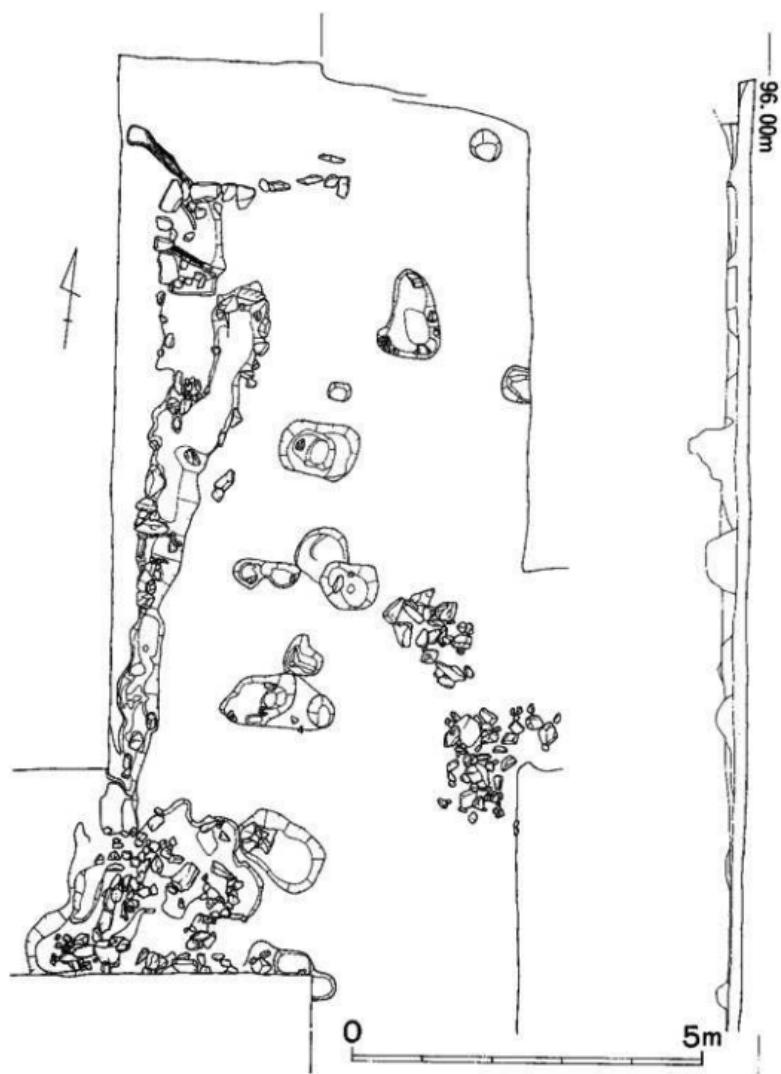


第3図 元屋敷遺跡I区トレンチ配置図



第4図 元屋敷遺跡I区遺構 全体図

して整地されていることがわかり、建物跡 2・集石遺構 2・石組施設・溝跡・土壌 5等を



第5図 元屢敷遺跡 I 区 T-2 遺構実測図

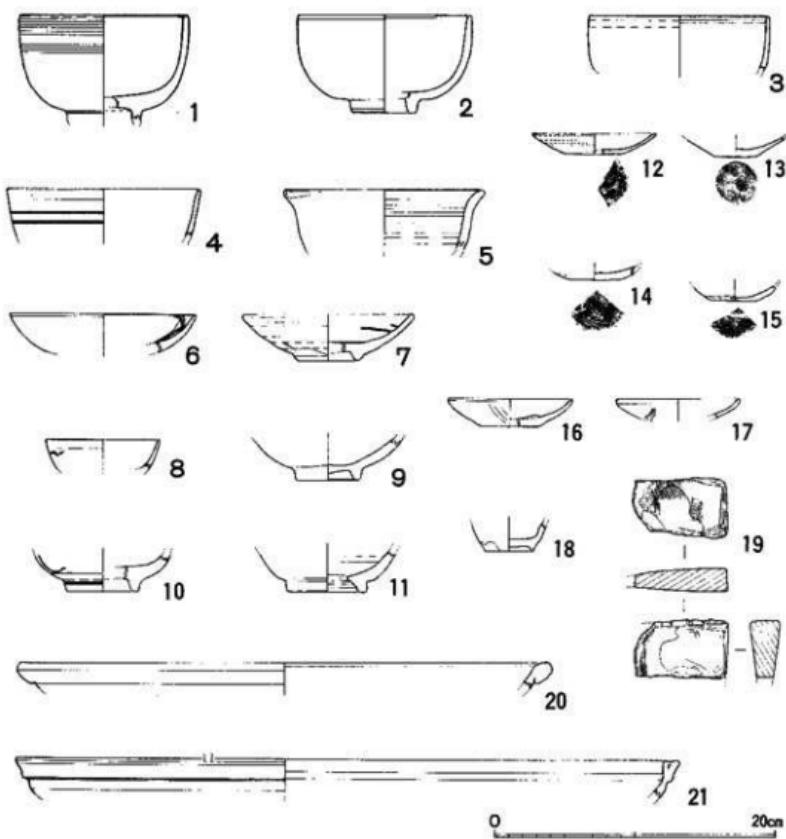
検出した。

T-2の北側で検出された石組施設は、 $2.72\text{ m} \times 1.24\text{ m}$ の東西に長い長方形を呈するものである。石は長さ20cm～50cmの河石で石列を組み、間に小さな石を使用して面をそろえている。性格としては屋敷を区画するものと思われるが、周囲から遺物はあまり出土していないので不明である。この石組施設の南西隅から南に石組の溝が伸びている。保存状態が悪く石列は乱れて整然としていない。その規模は検出長7.4m、幅0.4m～1mあまりである。またこの溝に沿って数ヶ所に柱穴が見られ、この施設に伴う遺構が存在していた可能性がある。このような在り方は、島根県教育委員会が昭和55年度に実施した富田城関連遺跡群発掘調査塙谷地区で検出した石積施設と類似している。

土壙はT-2内から総数5穴あまり検出した。これらの土壙は規格性がなく、椭円形・不整形とさまざまであり、深さも60cm～90cmとまちまちである。T-2南側で検出した土壙は、長辺8m、短辺約2mを測る最大規模のもので、底部は凹凸な不整形を呈している。またこの土壙は、北から南へ伸びている溝を切っており、壙内からは肥前窯の半磁器と寛永通宝が出土している。遺物としてはこの他に耕土中および遺構検出面より土師質土器・伊万里・美濃焼片が出土している。

T-2から出土した遺物には、土師質土器(12～17)、伊万里(6)、美濃(3・4)肥前、その他產地不明なものか數点ある。大部分は表土層下の黄褐色砂質土層で出土しているが、4・6・16・17・19・20・21は溝内より出土している。

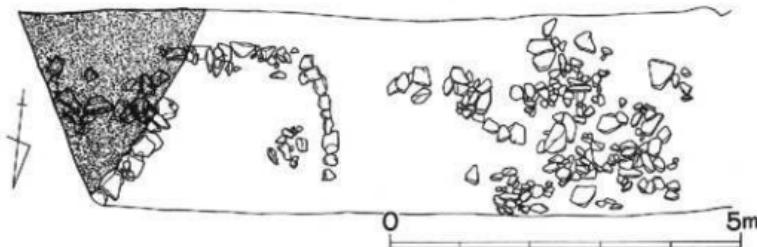
土師質土器は全て皿で、口径9cm前後的小形品である。12・16・17の口縁部は単純に終わっているが、底はほとんどが丸味をおびた平底である。全体に焼成は良好で造りはていねいである。見込みと体部の境にナデをほどこし、外面は横ナデをほどこしているものもある。12・17の外面にはススが付着している。美濃はいずれも碗で、口径18cm～14cmのものである。全体にヒビが多量に入っている。釉は淡い肌色ないし淡黄褐色である。伊万里は皿で、内面に斜線を組み合わせた文様と界線が描かれている。焼成は良好である。1・2は口径12.2cm・12.6cm、10は内外面とも薄緑色の釉がかかり文様は暗緑色である。いずれも肥前窯の半磁器で18世紀前後と思われる。8は口径8.2cmの小ぶりなもので、内外面とも火をうけて変色している。18は背白色を呈し、高台近くになると釉がたれている。青磁と思われる。19は溝内より出土したもので、表裏面ともみがかれており硯と思われる。20・21は擂鉢の口縁部である。21の口縁部は捻り返して脣部上端に接続している。この2つは越前焼の胎土の特徴をそなえており、從来富田城周辺では16世紀の遺跡から出土した



第6図 元屋敷遺跡Ⅰ区T-2出土遺物実測図

例が見られる。直接遺構に伴って出土していないが、これらの遺物から江戸時代後半頃の様相を呈している蓋然性は高い。

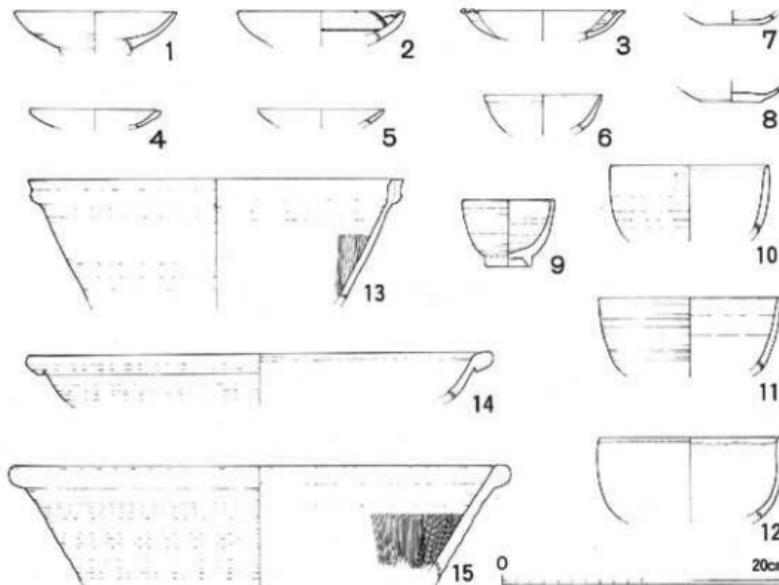
建物跡Ⅰは、T-3東側で確認された。平面形は隅丸方形で20cm～50cmの平石で面をそろえるように区画され、その外側に幅20cm、深さ10cm～15cmの溝が巡っていた。また建物跡の南西隅に径10cm前後の柱痕が残存していた。建物跡Ⅱは、建物跡Ⅰの東側で重複する形で検出した。80cm～60cmの平石で面をそろえており、遺構上面には厚さ10cmの炭化物を含む焼土が確認された。焼土中からは瓦片が出土している。集石遺構2は、T-3西側



第7図 元屋敷遺跡Ⅰ区T-3遺構実測図

で確認された。石は河石が多くその大きさは拳大から人頭大までさまざままで比較的まとまって存在するが、後世の攪乱をうけているため、その性格は不明である。遺物は、耕土中および遺構検出面より土師質土器、伊万里、唐津片等が出土している。

T-3から出土した遺物には、土師質土器（4・5・7・8）、伊万里（2）、唐津（9）天目（12）などがある。土師質土器は全て皿で、7・8の底部には回転糸切の痕跡が認め



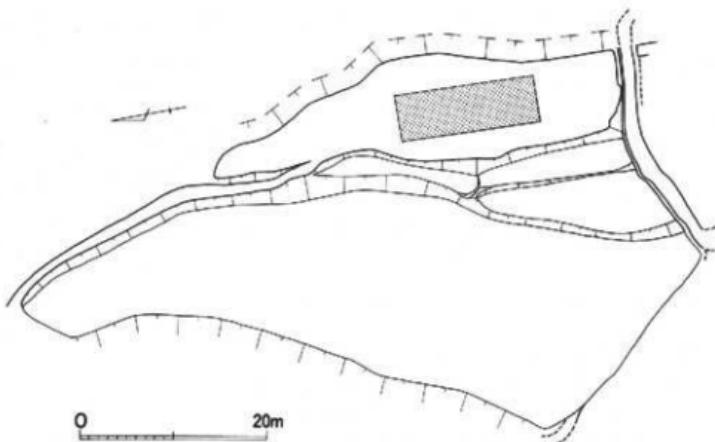
第8図 元屋敷遺跡Ⅰ区T-3出土遺物実測図

られる。唐津は口径 6.6 cm、高さ 4.8 cm のぐいのみで、口縁部はやや外反する。伊万里は口径 12 cm のもので、内外面とも灰白色の釉がかかり、内面上端には青色の文様が施されている。18~15は捕鉢である。18は口径 26.8 cm で口縁部は外側に捻り返して脇部上端へ接続している。内面はロクロ調整がなされ、下端に向け縦方向、その後斜方向に竹か棒状のもので入れており、九州系の様式をそなえている。14は口径 38 cm、内外面とも茶褐色の釉がかかり、内面には一条の凹線を入れている。15は口径 36.2 cm のもので、内外面とも黒褐色釉がかかっているが、内面全体は黄ばみ、シミがついている。その他に肥前系の半磁器、布志名焼系のボテボテ茶碗、さび絵のついた小片が出土している。これらの遺物から若干明治期のものが含まれるが、概ね江戸時代中葉から後半にかけてのものと思われる。

I 区

この調査区は、新宮川が下流に向かって北から西へ進路をとる変換点あたりの川沿いの微高地上に位置している。後世の改変によって全体の地形は大きく変わっており、川に面した前面部分は本来もっと張り出していた可能性がある。

調査は、調査区に幅 5 m、長さ 15 m のトレンチを設定して実施したが、明確な遺構は確認できなかった。遺物としては耕土中より、18世紀前後の肥前産半磁器、唐津焼片、越前焼捕鉢片等が若干出土している。



第 9 図 元屋敷遺跡 I 区トレンチ配置図

IV 結語

以上、元屋敷遺跡の概要を述べてきたが、昭和55年度から昭和58年度までの4年間で発掘調査を実施してきた塩谷・新宮谷遺跡の成果をふまえて総括を行い若干の私見を述べて結びとしたい。

塩谷遺跡では、谷中央部で溝を伴う長さ88mの石積施設、掘立柱建物跡・柵列・集石構造・土壙等を検出し、区画された建物跡が存在していることが確認された。また谷入口付近からは広範囲にわたるシルト層が確認され、沼か湖のような湿地が存在していたことが明らかとなった。

新宮谷遺跡では、礎石建物跡・掘立柱建物跡・石組構造・集石構造・土壙等多数の遺構が検出された。遺構は分散的ではあるが比較的日当りのよい微高地上に立地し、大畠・惣連場地区ではしっかりとした柱穴が並んでいたことから武家屋敷地の推定を立証するものと判断された。大畠地区からは方形土壙内より備前焼を含む中国製陶磁器が出土し、三太良遺跡出土品とともに当地の編年をするうえで貴重なものといえる。また惣連場地区は、須恵器・土師器が多量に出土しており中世以前の遺構が存在していたことが確認され、今田地区では近世の鉄跡が発見されている。

一方、元屋敷遺跡では塩谷地区で検出された石積施設と類似した石列を配する建物跡・土壙等が検出され、この地域にも遺構が存在することが明らかとなった。

このように4ヶ年の調査で多数の遺構・遺物を検出した。そのほとんどが部分的な調査であったため遺構の性格は明確に把握できなかつたが、それぞれの谷で若干の差異がみられる。すなわち、屋敷地として塩谷は谷全体に存在しているのに対して、新宮谷は分散的にみられ、遺物としては塩谷は16世紀初～中葉、新宮谷は16世紀後半と位置づけている。

のことから、これらの谷は唐津・伊万里といった17世紀代の遺物がきわめて少量しか出土していないことから、尼子氏の滅亡とともに屋敷地として利用されなくなり城下の再編成が行われたと推定され、今後、中世地方都市の様相を知るうえで富田川河床遺跡とともに塩谷・新宮谷のもつ性格を考えていくべきであろう。

<参考資料>

- 「塩谷遺跡発掘調査報告書」1981年3月 広瀬町教育委員会
- 「新宮谷遺跡発掘調査報告書」1982年3月 広瀬町教育委員会
- 「新宮谷遺跡第2次発掘調査概要」1983年3月 広瀬町教育委員会
- 「史跡富田城跡遺跡群発掘調査報告書」1983年3月 島根県教育委員会

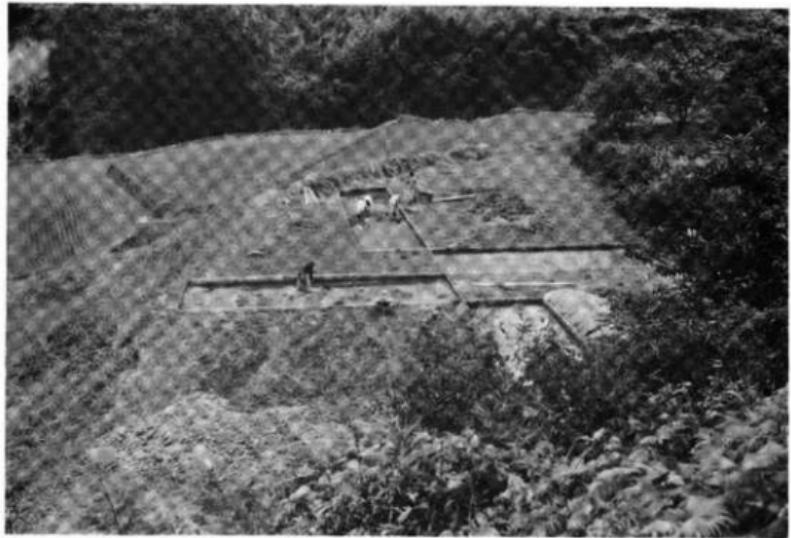


富田城周辺の遺跡
元屋敷遺跡 航空写真

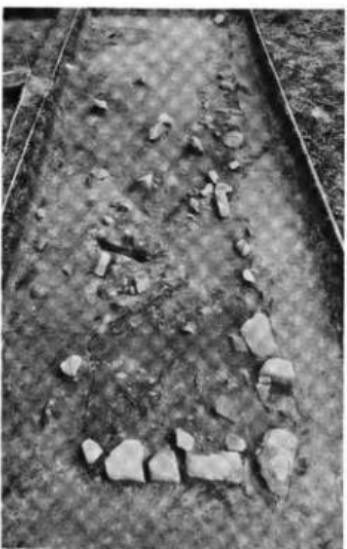
1. 月山山頂 2. 山中御殿平 3. 新宮党館跡 4. 明星寺跡 5. 日丸



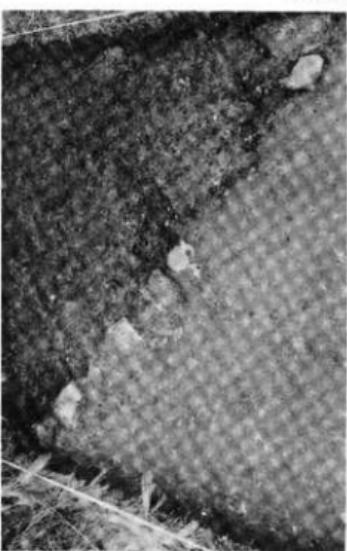
1 元屋敷遺跡 I 区発掘前遠景(東側から)



2 元屋敷遺跡 I 区発掘後前景(西側から)



1. 元屋敷遺跡 I 区 T - 2 遺構検出状況



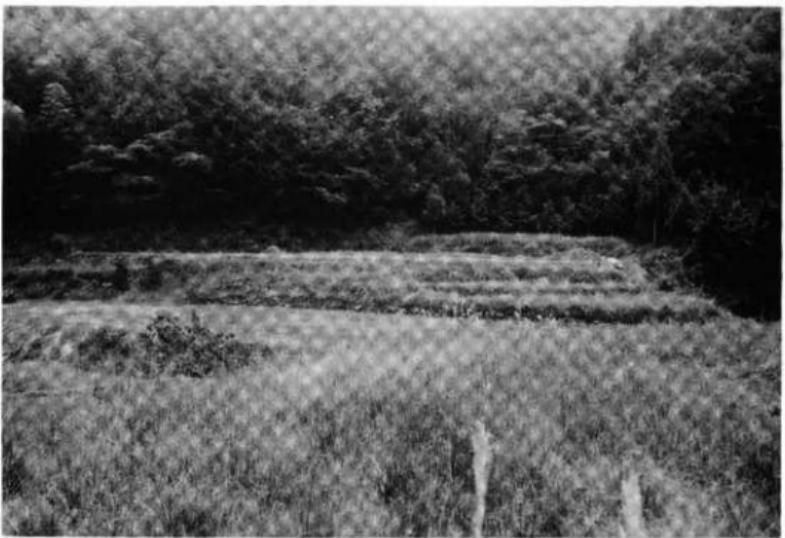
2. 元屋敷遺跡 I 区 T - 3 遺構検出状況



3. 元屋敷遺跡 I 区 T - 2 出土遺物



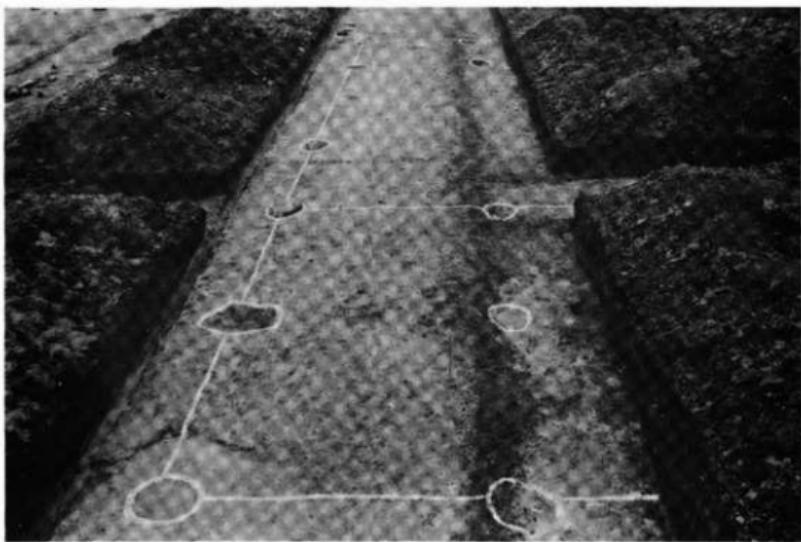
1. 元屋敷遺跡 I 区 T - 3 出土遺物



2. 元屋敷遺跡 II 区遠景（西側から）



1. 新宮党館跡遠景（南から）



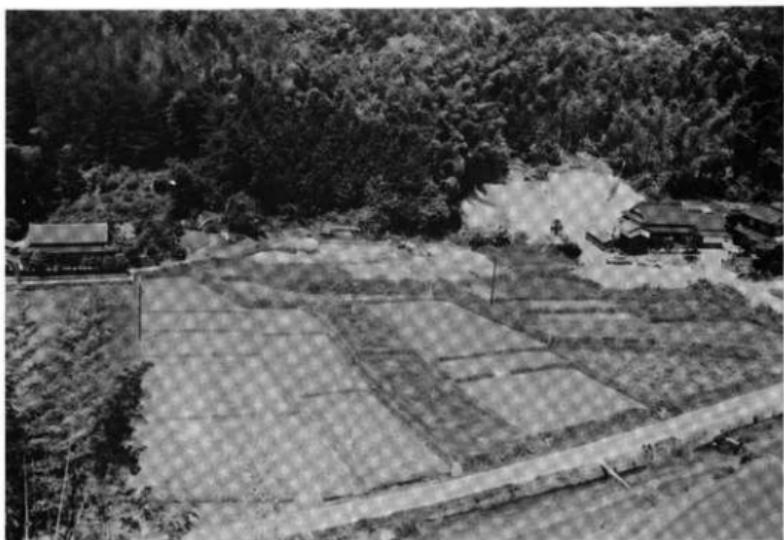
2. 新宮党館跡建物跡



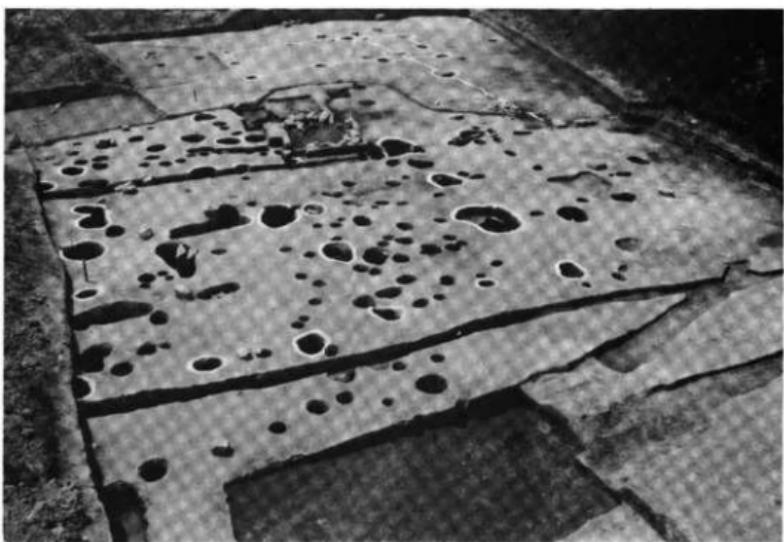
大畠地区遠景（東北から）



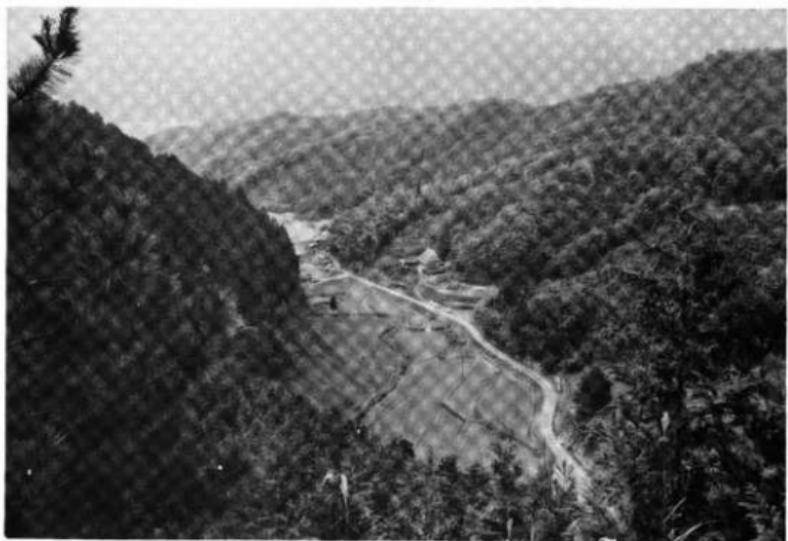
大畠地区掘立柱建物跡



1. 惣連場地区遠景（南から）



2. 惣連場地区遺構検出状況



1. 今田地区遠景(東から)



2. 今田地区鉱跡

元屋敷遺跡発掘調査報告書

1984年8月

発行 烏根県能義郡広瀬町立
広瀬町教育委員会

印刷 烏根県能義郡広瀬町立
大栄印刷所